

ておくわけにもいかないと、四疊半二間の家ができた。井戸も風呂もない、電気もない、ランプ生活を十二年間続けられたようです。

野菜と果実の行商で生計を立て、朝の暗いうちから八キロも離れた新発田の街までリヤカーを引き、雨の降る日はミノを着て雪が積もればそりを引き、街の中心を売り歩き、初めのころは売れ残ったり、経済的に大変だったようだが、だんだんとお得意さんも多くなり、ようやく中古の家を買い、井戸も風呂も電気も灯る家に住むことができたのです。

五十歳を過ぎてから、バイクに乗っての行商、そんな姿を町政だよりに、戦後四十年と五十年の節目の二回にわたり載せていただき、「満州のカアちゃん」と呼ばれ親しまれ、街の有名なおばあちゃんとなったのです。

三人の娘さんたちも立派に育て上げられ、それぞれに結婚、昭和五十九年には娘さんたちと共に訪中団に参加、亡きご主人と末娘玉代ちゃんのお供養と犠牲になられた方々の霊を慰めてまいりました。

長女義子さんには、弥栄会の（会員四百戸）支部長として活躍をいただいております。

（弥栄会 満蒙開拓第一次移民団

副会長 廣谷 幸三郎）

満州第一次武装開拓団

弥栄村の追憶

長野県 小倉 幸男

はじめに

満州第一次武装開拓団は、満州移民が国策として是か否かを決定するための試験移民であるということで、団幹部以下団員それぞれが、匪賊の横行する中、万難を排し不撓不屈の開拓精神で弥栄村を立派に築き、国策是なりの答えを出したのである。私は弥栄村の生き残りの団員（八十六歳）として当時の記録を記した次第です。

少・青年のころ

明治四十三年五月二十五日（一九一〇年）、長野県下伊那郡上久堅村平栗六〇八九番地（現在飯田市）で小倉惣作の四男として生まれる。大正十三年三月上旬久堅村尋常高等小学校を、昭和二年三月県立下伊那農学校を卒業した。家は小さな自作農であった。

農学校を卒業後、家の手伝いをしながら勉強して高等農林学校（農大）を受験したが、不合格に終わり残念ながら進学は断念した。

現役軍隊生活

昭和の初期は米国をはじめ諸外国より経済封鎖に遭い、日本は不況のどん底で低迷していた。軍備においても縮小時代で、現役兵として服役するものも数少なかった。

私は小学校時代は「チビ」であったが、その後急成長し、身長一六四センチ体重六十キロで当時としては標準以上の体格となり、昭和五年四月の徴兵検査では見事甲種合格となった。長兄は第一乙種、二男、三男は丙種で、いずれも兵役には縁の少ない者ばかりだった。

たので、私の甲種合格には家内中で大変喜んでくれた。長兄は奮発してお金がかかるが、幹部候補生を志願するよう勧めてくれた。私の喜びは大変なもので、今でも感謝している。

幹部候補生の入隊は一般現役兵より一カ月早く、昭和五年十二月一日松本歩兵五十連隊へ入隊した。同年兵は八十人で各中隊に配属され、それぞれ内務班を編成し、学科に教練に毎日休む暇もなく訓練が繰り返された。

翌年の五月末、一期検閲が終わり、上等兵、八月伍長、秋季演習が終わり軍曹の階級に進み、最後に幹部検定試験に合格、見習士官を拜命、十一月三十日無事現役満期除隊となった。

満州開拓への道

昭和六年九月満州奉天、柳条湖の満鉄線路の爆破（柳条湖事件）を契機に満州事変が勃発し、関東軍によって半年たらずの間に満州の大半を制圧、新政府満州国を設立し、溥儀氏が執政に就任、年号を大同元年（後に康德）として発足した。

一方国内の経済情勢はアメリカをはじめ各国の経済封鎖を受け景気は極めて悪く、農村における二、三男対策に苦慮していた。折から、関東軍においては石原参謀、東宮大尉を中心に、また国内においては加藤元治氏、石黒忠篤氏、那須浩博士などの先覚者や学者が相図り、武装移民の選出により満州の治安維持と農産物をはじめ、膨大な資源確保の遠大な計画が策定された。軍部並びに政府に建議での幾多の曲折はあったが、時の政府に採択された。昭和七年八月寒い東北と長野・新潟を含む十一県から、第一次武装移民、一個大隊五百人を募集することに決定したのである。募集要領はおおむね次のような内容であった。

一、軍隊の既教育兵であること。

二、三十歳未満にして志操堅固、困苦欠乏に耐える在隊成績良好なるもの。

三、三年間は仕送りを要しないもの。

四、理想郷建設に邁進し北満州に骨を埋める確固不動の精神を持つ者。

などであった。

次に募集は各県の連隊区司令部がこれに当たり、町村長の推薦書、履歴書、口頭試問、身体検査などなかなか厳しい選考であった。

私はいろいろ考えたすえ、「俺の生きる道は満州だ。思う存分頑張ってみよう」と腹を決め長兄に相談、快諾を得たのである。

昭和七年八月二十日（一九三三年）午前十時、松本連隊区司令部へ出頭した。県内から既に五十余人の青年が集まっていた。その中に現役のとき、幹部候補生で同班にいた勝野拡弥君がおり力強く感じた。八月末役場から武装開拓団への採用通知があり、これで私の運命は決まったのである。長野県では四十二人（下伊那では長沼、筒井と私の三人、上伊那では武田、吉川、矢ヶ崎の三人）が採用決定となった。

(一) 内地訓練から渡満

満州事情と農業知識の吸収、開拓精神陶冶のため、茨城県友部の国民高等学校において短期訓練が行われることになり、九月五日同校へ入校した。毎日が精神訓話、開墾作業、駆歩（体力増進のため）の連続で加

藤完治先生（校長）をはじめ「モーレッツ」先生方の訓導を受け食事の面では麦飯、粟飯、一汁一菜で心身共に鍛えられた。訓練期間に第一次武装開拓団（別名屯墾第一大隊）の編成が行われ、小生は長野小隊所屬で大隊本部付を命ぜられる。九月二十五日訓練を終了、それぞれ渡満準備のため郷里へ帰還す。帰宅後挨拶回り、村の壮行会、荷物の整理などの多忙を極めた。

昭和七年十月三日午前七時、東京明治神宮外苑に集合。正式に大隊編成を行い、市川大隊長抜刀指揮を執り、明治神宮を参拝した。引続き隊伍堂堂と直系官庁である拓務省を訪問、永井柳太郎大臣の訓辞を受け、東京駅より臨時列車に乗車、一路神戸港へ。名古屋駅では叔父一家のほか、知人が見送りに来てくれて感激した。四日昼、神戸港着。船へ物資を積載後休養、五日正午乗船、七日朝大連着（関東軍の東宮大尉が出迎えてくれた）。荷物の陸揚げ後、胸おどらせながら満鉄の広軌鉄道に乗り奉天へ、九日朝到着。すぐに北大宮旧張学良の兵舎へ入る。関東軍によってあらかじめ準備されていた武器弾薬、軍服及び防寒具の支給を受

け完全武装をする。

十月十一日奉天発（列車）、十二日ハルビン着。夜、松花江の貨物船に乗船し、十四日夕、佳木斯港へ到着したが、佳木斯が匪賊の襲撃を受け現地部隊にも死傷者数人あり、上陸は不利のため船内に待機、翌十五日早朝上陸、関東軍によって準備してくれた仮兵舎に入った。昼食後、隊伍を整え佳木斯市街で示威行軍を行い、「屯墾隊ここにあり」の威力を誇示した。

(二) 佳木斯市街地の警備と越冬

北満の寒さは殊の外厳しい。開拓地への入植は匪賊の横行による治安問題と寒さのため、来春までできないので、それまでは「佳木斯の整備と現地入植の諸準備」を行うことになった。農事関係幹部は山崎芳雄団長、佐藤修、平田静人、堀北獣医、医師は堀江軍医。警備関係幹部は市川中佐、熊谷大尉、沓沢中尉、工藤中尉、須永中尉の方々でそれぞれ自己中隊の陣頭指揮に当たった。私は団本部において副官業務、その他庶務事務を担当して忙しく働いた。

(三) 本隊入植と弥栄村の建設開始

昭和八年二月十一日（一九三三年）紀元節の佳き日を卜して山崎団長、熊谷大尉以下百五十人の先遣隊が早期に出発、永豊鎮（孟家岡）へ入植。嚴寒零下三〇度の中で、本隊受け入れの準備作業に着手する。

二月十五日物資収集班が匪賊と交戦、団員渡辺熊治君戦死す。更に三月二十日伐採班警備隊が匪賊と交戦し佐藤宗助、加瀬谷功、菅原玉吉の三人戦死す。寒さと匪賊に備えての本隊受け入れ準備は大変な苦勞であった。

三月二十七、八日の両日にわたり関東軍東宮大尉立会いのもと市川隊長、山崎団長と満州樺川県長唐純礼氏、地方民代表孫徳氏との間に土地協定が行われ、弥栄村の地域境界が明確化されたのである。私は秘書役として同席し書類を作成する。

四月一日本隊が佳木斯より現地へ入植を完了したので歛入式を挙行、大麦播種を行う。四月二十一日各小隊（部落）長会を開き弥栄村部落用地に関する議定書を作成し十二部落構成の基礎を作る。各部落の区域用地が決まったので、一斉に共同家屋（満州式長屋）三

棟あての建築にかかり、各部落とも十月末に完成。付随した物置、倉庫、畜舎なども徐々に出来上がり越冬準備に入る。

八月十五日東本願寺高橋麗真師（翌年本多監純師交代）着任、弥栄本願寺を開設す。また精神的なよりどころとして村の中心の丘に弥栄神社を建立し、南山に忠魂碑を建立した。

四 弥栄村本部紅槍会匪賊に襲撃される

本部は永豊鎮の中心地に独立した土壁をめぐらした中に三棟の建物がある既設のものを充當していた。この建物は元紅槍会匪賊の本拠地で、関東軍の指示により満州国軍が開放して開拓団に提供してくれたものであった。

各小隊（部落）は、入植現地に分散して農耕に家屋の建築に従事し、永豊鎮には購買部・木工班・農産加工・製材・鍛工・自動車輸送班・医務室など各施設の要員のほか、一部の警備要員がそれぞれ分散して建設業務に従事していた。本部には市川隊長・山崎団長・農事指導員・私ほか本部要員など計十二人が、それぞ

れ建設業務の処理指導に夜遅くまで精いっぱい努力を続けていた。五族協和を旗印に満鮮人の出入りは自由に行われ、夜間の警備態勢も手薄であった。密偵による匪賊の情報収集も行っていたが、確報をつかむことはなかなか難しいことであった。

昭和九年二月十六日の夜は殊のほか、寒さが甚だしく（零下二〇数度）静かな晩であった。夜中の一時ごろか宿舎の外で急に怒号が聞こえ、窓から爆音と同時に小銃弾が連続飛び込んできた。一同飛び起き、直ちに反撃すること半時、隣室の市川隊長、山崎団長の無事は確認したが、隣の農事指導員宿舎との連絡はとれず、あせるばかりで、応援することもできず、外からの救援隊を待つほかに、必死の応戦を続けた。しかし手持ちの手榴弾の威力は大きく、敵の内部への侵入を防いだのが幸いであった。交戦すること約四、五十分だったろうか、宿舎の東端より火の手が上がり、焼き打ちを喰らったのである。そのころ工藤中尉の指揮する救援隊が到着し、外からの猛攻を加えたので、土堀内に侵入していた百数十人の紅槍会匪賊は、死体二

体を残し退散した。

夜明け後、宿舎内の壁や天井・ペチカは弾痕で蜂の巣のように穴があいており、よくもこの中で負傷もせずに済んだものと、お互い抱き合っただけで無事を喜んだ。それに引き換え、隣の宿舎は敵匪賊の侵入もあり、悪戦苦闘を続けこれを屋外へ撃退したが、残念ながら吉崎獣医・佐藤指導員・栗田指導員の三人はそれぞれ瀕死の重傷を負った。しかしながら幸いにその後の処置も良く全快した。

本部の匪襲により幹部三人の負傷者が出、ほかに武器弾薬を奪われ、弥栄村のみならず移民事業に一大衝撃を受けたことは、今でも悲痛な思い出として脳裏にこびりついている。

本部を襲撃したのは紅槍会匪賊（大刀会匪賊）で、彼らは元の本拠を奪取せんとする意図であったか。彼らは小銃のほか短い槍の先端に紅い「フサ」をつけ、呪文を唱えつつ銃弾などものともせず立ち向かうという狂信的な集団で、精鋭な日本軍も手を焼いていたのであった。

(四) 第三次花嫁部隊を引率して

昭和八年四月、本隊が現地へ入植した。各小隊（部落）とも、まず、共同住宅（長屋）の建設と農耕に、また一方匪賊に備えての警備・討伐に一丸となつて努力を続けた。幸いにして農作物（玉蜀黍・粟・大麦・小麦など）をはじめ越冬野菜も予想以上の収穫をあげ、住宅建設も進み、新しい共同住宅で越冬ができるようになった。

明けて昭和九年治安状態も次第によくなり、今年度は待望の個人住宅の建設に重点をおくことになり、既婚者の家族を召致することに決定した。それで宮城の森合庄三氏を団長として、第一次の家族召致を九月に実施した。引き続き部落建設が進むにつれ、昭和十年に第二次花嫁部隊を長野の高山利政氏を団長として九月に召致した。したがって婦人や子供のいなかった殺風景な開拓地も各施設の完備と共に一段と和やかになり、必然的に建設作業も農作業も殊のほか前進を見せ、大きな成果をあげたのである。

翌昭和十一年度は個人住宅も完成し、農耕地も個人

別に配分可能な段階まで進める計画になつたので、未婚者全員の第三次花嫁召致が計画され、三月中旬私が本部に勤務していた関係で、団長として青森をはじめ各部落の代表八人の団員と共に弥栄村を出発し、それぞれの出身県に帰り嫁捜し・結婚・渡満準備をすることに決定した。

私と長野の塩原松茂氏とは、東京へ出張の山崎団長と共に朝鮮経由で、福岡市の団長宅を訪問し長野の生家へ着いたのは三月十五日であつた。翌日からあらかじめ連絡しておいたスケジュールにより県内団員の家を巡回し、嫁さんの決定・仮祝言・披露宴・渡満準備などの連絡を行うほか、出身農業校・小学校その他の集まりで満州事情について講演会・座談会を行い忙しい毎日を過ごした。

四月六日、自分の結婚式（妻は伊那市福島 松崎さかゝ、媒酌人は出身校の下伊那農学校長 芝原彦十先生夫妻）を済ませ、第二回目の巡回は婿がないための仮祝言・結婚披露宴などへの出席（田中岩太郎・小林四郎・勝野弘弥・深沢国武・小倉初弥兄）、新妻と

共に正式な仲人を行ったものもあり、当時は自動車は
なく交通の便も悪いので、大多忙な毎日を通じた。

四月二十日までに弥栄村の本人あてに荷物発送を完了
し、四月二十二日十時に新潟駅集合の通知を各県代表
に打電し、白らもその準備を進めた。

いよいよその時がきた。あれこれ心配しながら新潟
へ一泊して、朝八時ごろから駅で案内旗を掲げながら
各県からの花嫁の到着を待った。付添人も多く大変な
混雑であったが、幸いにして定時までに六十五人が遅
刻者もなく集まりホッとした。正午新潟県庁で知事夫
人の計らいで簡単な壮行会の招待を受け、知事夫人よ
り激励の言葉と昼食を頂戴し感激した。

夕方新潟港着。付添いの方々と切ないお別れをして
二千五百屯の「月山丸」に乗船した。船は間もなく出
港、二十三日朝、朝鮮の清津港へ入港し上陸。図們經
由（当時は図佳線が未開通）二十四日朝ハルビン着。
松花江を船で下り、翌二十五日朝、長旅で疲れた体を
いやす間もなく佳木斯港へ上陸した。

港には団員諸氏が出迎えた。旧知の者もあれば写真

結婚で初めて会う者もあり、悲喜こもも初対面の引
き合わせも済み、佳木斯出張所で大休止の後、出迎え

の貨物自動車に分乗、昼過ぎには弥栄村本部へ無事到
着した。山崎団長さんの歓迎の挨拶の後、小生より長
旅での慰労と全員が団体行動に気を配り、助け合って
無事到着できた喜びと協力に感謝して挨拶を終わり解
団した。翌日、弥栄神社で、山崎団長以下関係者の出
席を得て伊佐間神官による集団結婚式が行われ、千代
の契りを結び、花嫁一同も弥栄村民となり後に大活躍
をしたのである。当時の社会教育や世相がからしめ
たとはいえ、よくも若い嫁さんたちが未知の満州、し
かも結婚の相手に会ったこともなく、写真結婚をした
者も多きいたものだとその意気込みに感心したもので
ある。

（六） 親戚縁者が渡満村造りに協力

(1) 私の兄（三男初弥）は長兄が小学校の教員勤めで
実家の農業経営ができないので、兄に代わって農業に
従事していた。しかし、私が渡満してから自分も満州
開拓に行くのだと考えていた。

一方、弥栄村では隣接地域へ縁故者による開拓村（西弥栄村）の建設計画が進められていたので、これにタイミングを併せ、私が花嫁部隊引率の時期を契機に妻帯し渡満、弥栄の住民となる。翌十二年春、西弥栄村の建設開始と同時に入団、村造りに成果をあげた。終戦の翌二十一年秋に無事帰国する。

(2) 森本正紀（私の隣部落小野子）は下伊那農学校の後輩で自家農業をしていたが、満州開拓挺進の意強く前記の兄と同様弥栄村の住民となり西弥栄村へ入団した。栗田団長の推薦により新京の獣医学校へ一年入学して特別教育を受け、西弥栄村の獣医として活躍した。昭和二十二年春に無事帰国する。

(3) 妻の妹すみ子は、昭和十六年春伊那高女を卒業と同時に渡満し、弥栄村共励組合へ勤務していたが、後に佳木斯の（勉満拓公社に勤務替えをし、私の家を本拠として頑張っていた。終戦の翌二十一年秋に私の妻、子供たちと帰国する。

(4) 妻の兄松崎長栄は、郷里で教員をやっており、昭和十八年春渡満。弥栄小学校西弥栄分校の主任教師を

拝命し、栗田団長と緊密な連繫をとりながら子弟教育に努力していた。終戦後、引揚げ団体引率中に病死。子供一人死亡。二十一年秋妻子は帰国する。

(七) 弥栄村現地訓練所の運営など

(1) 弥栄村機構の一部として当初、拓務省の指示と補助金を受け、後続開拓団先遣隊の現地訓練を行うため、昭和十一年三月永豊鎮（本地区区内）に現地訓練所を設置することに決定した。訓練所施設の建設は弥栄村の建設班により緊急工事が進められ、十月末おおむね訓練生の収容が可能になったので、十一月中旬より第五次信濃村など先遣隊約六十人余の収容を行い訓練所の開設を行った。

所長は山崎団長、私は副所長として訓練所の運営に当たることになった。昭和十五年、満州国へ移管し、名称も弥栄基幹開拓農民訓練所と改名した。最大収容時は百五十人という盛況であった。同時に職員員の身分も満州国の教士となる。訓練科目は開拓精神・五族協和・村造り設計・農業技術・農機具・畜産・中国語・氣候風土と生活・軍事訓練など先遣隊として必要な学

科・実習のほか、別途特技訓練も行った。職員は団員の中から適任者五人を抜擢ぼつごく、これに当て、別に特別講師として藤巻病院長・東本願寺本多師をお願いしていた。終戦前まで継続していた。

(2) 茨城県内原青少年義勇隊訓練所へ協力

加藤完治校長よりの要請により、私は昭和十二年五月より十月まで約六カ月間、教官として義勇隊訓練所に出向勤務した。義勇隊訓練所の本部付として訓練業務に協力するとともに、現地の実状紹介を行った。その間ラッパ鼓隊（約百人）の先導指揮を執り、拓務省への挨拶と東京行進を行った感激は今でも記憶に残っている。

(3) 道林特技訓練所

昭和十八年四月、山崎団長の念願であった開拓団の建設に必要な特技訓練所を、満州開拓総局よりの補助を得て、ハルビン―牡丹江の中間横道河子駅の隣接地、道林地区に建設することに決定。かねてから弥栄村に待機していた石工・木工・鍛工・鞆工などの職員のほか、基幹訓練所の職員が兼務し、私が副所長として近

隣開拓団より十数人の子弟を集め、訓練業務を開始した。その後順調に進展を続けたのであったが、二十年に入り、私をはじめ職員の応召が次々と始まり、戦局も次第に不利を伝えられ、このままの継続は無理と判断し、八月初めの訓練所は一時閉鎖され、訓練生は全員家庭へ帰還させた。事業途中で中絶したことは誠に残念であった。

応召軍隊生活から敗戦、シベリア抑留

(一) 応召軍隊生活

昭和十六年七月二十三日、関東軍野戦鉄道司令部要員として牡丹江独立守備歩兵第二大隊へ応召、弥栄村では第一号召集である。

昭和十六年七月二十八日、関東軍第三停車場司令部に編入。東安停車場司令部付・西東安出張所長勤務を命ぜられる。

業務の内容は部下数人と共に列車による兵員、武器弾薬、資材などの軍需輸送に当たる。関東軍特殊演習に参加。昭和十七年十月一日、一年三カ月で召集解除帰村す。

昭和二十年三月二十日、第二回目の臨時召集により歩兵第二六七連隊へ応召入隊す。第一中隊第一小隊長を拝命。次に連隊本部付、次に本隊が鏡泊湖陣地へ移動した。連隊の留守部隊長。その後牡丹江の奥地鏡泊湖陣地へ転進す。

昭和二十年七月二日、第十一中隊長を拝命。

野戦重砲一個小隊の配属を受けて南湖頭の独立陣地を占拠す。しかし戦局は我々に利あらず。八月十五日、正午終戦の詔勅をラジオで聴き嘩然として言葉なし。

八月十八日、中隊長以上集合。連隊の象徴である軍旗を焼却す。くやし涙とめどもなし。

八月二十日、武装解除ソ連軍の指揮下に入る。

(一) 終戦とシベリア抑留、帰国

九月十日、所属する第四師団が牡丹江の掖河へ集結シベリア転送の部隊編制が行われ我が中隊は高橋大隊の第三中隊(百六十五人)となる。九月十五日昼、牡丹江掖河駅より貨物列車に乗車し、シベリアへ向かう翌々日広い原野の小さな駅に到着、徒歩で約三十分ぐらい離れた収容所(ラーゲル)に収容さる。

ここで全体の動きの一部を記述する。

ソ連が対日不戦条約を無視し、満州へ侵攻を開始したのは、昭和二十年八月九日午前零時であった。ソ連はワンレフスキー元帥の指揮する極東方面軍とマリノフスキー元帥の指揮するザバイカル方面で、総兵力約百六十万、戦車四千五百両、航空機四千機であった。これに対し我が軍は関東軍、朝鮮方面軍を合わせて約七十五万人。既に従来の関東軍の精鋭部隊は南方作戦に転進し、残った部隊は応召に次ぐ応召で、急造編制した弱体な関東軍に変わっていた。

八月十七日の停戦命令で砲火はやんだ。武装を解除された将兵は「これで日本へ帰れるぞ」と胸をおどらせたが、その行く先はシベリアであった。関東軍のほか樺太・北千島の各部隊も同様の運命であった。シベリアへ強制収容された者は軍人・軍属・民間人も合わせて五十七万人(厚生省調べ)と推定されている。終戦時日本政府が受諾したポツダム宣言第九条には、「日本軍隊は完全に武装を解除させられた後に、各自の家庭に復帰し、平和且つ生産的な生活を営む機会を

与えらるべし」と明記されており、二十一年十二月までに「民族の大移動」と称せられた五百八万の旧軍人・邦人が中国大陸・南方・比島・台湾の各地域から懐かしの祖国に帰還したが、残念ながらソ連地区からは一人も帰還しなかった。

ポツダム宣言の主要参加国であるソ連政府は、我々を速やかに日本へ送還すべきであるのに、当時のソ連国内事情はこれを許さず、五十七万余の我々を不法にも戦後復興五カ年計画に動員し、ソ連国内および占領地域に銃と剣で威嚇しながら拉致し、戦争賠償の肩代わりとして、長期にわたり強制抑留し、過酷極まる労役が課せられたのであった。

私が収容されたラーゲル（収容所）は、シベリア第一地区三〇八収容所で、位置は沿海州ニコリスクの手前、コムソモリスクの近くで、山の中。五百人ぐらいは収容できる規模で鉄条網が幾重にも張りめぐらされていた。作業は主として伐採と鉄道工事・丸太建築・道路工事などの作業が多かった。

作業はすべてノルマ制（作業率基準百パーセント）

で、よく働く者はノルマ高く、したがって食料の配給も多い。若い者や体力の強い者はよかったが、反面体力の弱い者、年齢の高い者はどうしても作業能率が上がらず、したがってパンが小さい。シベリアの寒さは殊のほか厳しく（零下五二度の時もあった）、寒さと飢えてじり貧、体が衰弱し栄養失調となり、ついに死亡するという事態が多く発生した。初年度で八パーセント近い犠牲者を出し悲痛な明け暮れであった。

木の皮をはじめ、雪の下の草類まで食べられるものは手当り次第食べた。また南京虫が多くて夜の安眠ができず、疲労の度を増し苦痛であった。

中隊長は中隊全体の内務並びに作業監督で、ソ連監督との交渉はできるだけ作業の軽減を図ることであった。時には作業成績が悪くて、罰則で営倉（留置場、百グラムのパンと毛布一枚）暮らしをしたこともあった。私は幸いにして生まれつき丈夫だったので、問題の多かった第一年目の越冬も無事に過ごすことができた。

兵舎はバラック建てで、二段式のベッド・板敷きに

毛布、暖房は薪ベチカ、窓は小さく日照不足、夜の照明は石油ランプ、建物は炊事場・風呂場（ムシ風呂）・集会室・医務室などに区分されていた。慣れるに従って関係するソ連人との交友もでき、毎日の生活にも精神的な幾分のゆとりができたのだが、一方病弱の者はオーカー（病人）として、ほかの収容所へ転属したために、労働過重となり我々仲間でもまた多数の死亡者も出て、中隊の人員は当初の八割近くに軽減していった。

私は農業出身者であり、善良な将校であることが認められ、帰国の第一選抜に選ばれ思わず万歳を叫んだ。帰国予定者は特別に赤化教育を受けて、二年十カ月苦難の道をたどったシベリアの地を離れることになった。昭和二十三年六月一日、収容所を出発。貨物列車でコムソモリスク↓ハバロフスク↓ナホトカ港へ到着。ここで新たに帰国集団が編成され、帰国船を待つこと一週間、六月十八日に待ちに待った日本船「明優丸」がナホトカ港の岸壁へ横付けされた。感無量。一秒たりとも忘れることのなかった日本へダモイ（帰る）が、

現実のものとなった。新たに作られた集団ごとに乗船、十九日の昼出港、二十一日の朝舞鶴港へ上陸、検疫と復員業務を済ませホッとした瞬間に、やっと日本へ帰ったという実感がわいてきた。

復員事務所で妻さかゑよりの手紙を受け取る。「妹すみ子と一緒に秀敏、俊行を連れ、幸江（二歳）は死亡、二十一年十二月無事帰った」由の知らせで安堵の胸をなでおろした。わずかの旅費、小遣いの支給を受け懐かしの故郷へ!!

六月二十三日夕、あらかじめ電報で知らせておいたので、飯田線北殿駅に松崎の父親をはじめ妻や子供たちが出迎えてくれ感激の対面となる。敗戦のみじめさを痛感する。戦争は決して行つてはならない。

終戦後の生活

妻さかゑや子供たちは、昭和二十一年十二月九日、伊那市福島の家へたどり着き、母屋の一部を借りて生活をしていた。

子供たちは伊那北小学校へ。妻は知人などを頼りながら古物商を始め、わずかばかりの利益をかせぐほか

は、農作業の手伝いをして子供たちの養育をするみじめな生活であった。

昭和二十三年六月二十三日私は帰ったが、シベリア抑留の三年がたたり、思わしい職はなく、伊那町の素灰工場（豆炭材料）で四カ月ほど真っ黒になって働いた。そのころ、長野県で農業改良普及事業開設に伴い、普及員の採用国家試験が行われることを知り、これに挑戦することにした。シベリアポケを防ぐため義弟より農学校の教科書を借り勉強をした。十月初め国家試験が行われた。上々の成績ではなかったが、合格通知をいただき感激した。

(一) 長野県職員採用発令

昭和二十三年一月十日長野県庁において採用辞令を受領した。

十一月十二日より高遠町役場に机を置き、中山正弘技師と二人で一町六カ村の広い地域の農業改良普及事業の推進を行うことになった。翌二十四年四月より中山三郎兵エ技師が加わり、更に普及事業強化のため二十五日より農政四人、生活改良（女子職員）一人を加

え、計八人となった。役所は高遠地区農業改良事務所と改名し、私が地区主任となった。

普及事業は人間教育であり、農業技術の現地指導であった。更に生活改善事業の推進と青少年の育成（四日クラブ）にあった。普及事業発足以来農業生産は飛躍的に増大し、生活改善（特に台所）も大いに進んだ。このころの普及事業の成果は実に大きかった。当時、農業改善普及員のシンボルであった緑の自転車（後には緑のオートバイ）で地区内の巡回をした。指導は努力の成果が目に見えて上がり、楽しかったことは今でも忘れられない。高遠地区主任を五年六カ月勤め、二十九年四月より箕輪町勤務となり町村合併の推進と農業指導に専念する。

(二) 給料半分の生活

県職員に採用され、どうにか食うには心配はなくなりましたが、住宅を作らなければと思ひ悩んでいた。幸いにして二十四年度より伊那町で住宅組合を組織し、第一回の資金貸付け十二戸を建設することになったので、この一員に加えてもらい、建築することが決定、八月

吉日上棟式を行い、突貫工事で十二月二十八日待望の我が家へ入居することができた。小さいながらも我が家で一同そろって年越しのお祝いができたことは、苦しみの後だけに嬉しさも大きかった。しかし、新しい住まいはできたが、毎月建築組合への建築費を短期（五年）分割で支払わねばならなくなった。この時点から当分私の給料半分の生活が始まった。

県職員として二十年間、思う存分働いて悔いることなし、その後たつての要請により、(出)長野県LPガス会社へ勤務替え、参事として十二年勤めた。

まとめ

昭和七年十月第一次武装开拓团员として渡満以来、困難な弥栄村の建設をはじめ、匪賊との交戦、二度の召集、終戦シベリア抑留、長男及び妻の死、再婚など、私の人生は波瀾万丈の人生であった。それにつけても難関の都度、多くの方々からの手厚い御指導と御鞭撻を賜り、厚く感激の意をささげる次第であります。

【執筆者の横顔】

小倉さんは明治四十三年、長野県伊那郡の農家に生まれた。昭和初期は農村恐慌の時代であり、成績優秀で資産家の子弟が上級学校に進学できた時代である。農学校から高等農林に受験し得る生徒は数年に一人ぐらいという。

当時の軍隊で幹候に志願できる者は、中等学校以上の卒業生で成績優秀、殊に軍事教練で将校適任とされた者のみであった。

小倉さんは昭和七年に少尉に任官して除隊し、第一次武装移民に応募した。長野小隊は農村の模範青年のみが参加した。

将校であり、誠実無比、頭脳明晰。実行力、決断力があり、本部副官の業務を担当された。既に六十五年の歳月が過ぎ、当初の団員の生存者はわずか十人余りであり、幹部として活躍されたのは小倉さんのみである。

満州开拓当初の苦難の「語り部」として、書かれた本稿は貴重な資料である。

私の父は蒙古軍軍医として勤務、東宮鉄男氏の要請により直ちに退官し、昭和十一年末に弥栄病院長に就任した。当時小倉さんは後統開拓団の先遣隊の訓練所の副所長の要職にあった（所長は山崎団長で義勇隊訓練所長で不在）。

小倉さんと私の父は意気投合し、よく酒を酌み交わしたという。小倉さんは終戦間近に再応召された。ソ連軍侵攻と共に家族の方々が悲惨な逃避行中、二歳の長女が亡くなられた。

小倉さんはシベリア抑留、多くの苦難を体験されたが、逆境にあっても人情中隊長であったという。

帰国後は、奥様の実家の厩舎を改造して住み、深夜まで猛勉強し、第一回の農業改良普及員の国家試験に優秀な成績で見事に合格された。勤務に精励、多くの実績をあげ、所長に栄進された。

しかし、悲しい不幸にも遭われた。昭和二十五年長男の秀敏さんが日本脳炎で急逝された。私の妹と弥栄小学校で同級生、成績抜群で級長をしていたと追憶している。その十年後に最愛の奥様が四十五歳で三人の

子供を残して逝去された。

その後良縁を得られ再婚、幼いお子さんも実の母のごとく慕い、それぞれ立派に成長し一家をなした。ご夫妻で拓魂祭、弥栄会、長野会にも参加され、すなわち「満州弥栄一家」の一員である。

現在、新築三回目的邸宅に三世代同居の円満な家庭を作られている。

小倉さんは県職員定年退職後に区長をはじめ、多くの無報酬の役職に就かれ、地域住民から絶大な信望を得ておられる。

（弥栄会会長 藤巻 禧四郎）

この海の彼方に

富山県 嶋田 きよ

私の幼少のころ、父が馬を一頭買って馬車を引いていたのを覚えています。木材・木炭その他を運ぶ仕事でした。母はたくさんの子供を育て、百姓をしています